

種状況などが直接または間接に影響を与えているのかも知れない。なお、トキンプラズマ病による廃棄件数は年々減少する傾向にある。

一部廃棄の件数は当と畜場においても依然として多く、過去数年間における全国平均の廃棄率をみても65~70%と高率である。過去5年間にける主要疾病についてみると、消化器系では腸炎が2~3%のものに検出され、また肝炎や肝硬変など肝臓に異常が認められたものは15%であった。呼吸器系についてみると、肺炎が約60%のものに認められたが、その原因は多様であった。また、肺門虫症は1%内外となったが、10年前に比べて約1/10で、肺炎の存在と関係の深い胸膜炎や心膜炎はこの5年間に明らかに増加傾向が認められた。胸膜炎の多くは*Haemophilus pleuropneumoniae*の感染に基づく病変と考えられた。その他の一部廃棄の原因となったものに関節炎、筋炎、筋肉膿瘍など筋肉部分の病変も無視できない存在として注目されたが、その原因は多様であった。なお、表1は昭和61年度の成績である。

表1 昭和61年度における豚の廃棄状況¹⁾

廃棄部位	廃棄件数	廃棄率(%)
消化器	39,741	18.6
呼吸器 ²⁾	153,873	72.0
循環器	31,617	14.8
泌尿・生殖器	1,174	0.5
その他	3,276	1.5
全廃・禁止 ³⁾	288	0.1

1) と殺頭数: 213,647頭

2) 血液吸入肺による廃棄を除く

3) 全部廃棄・と殺禁止

と畜検査は本来、公衆衛生の見地から実施されるものであるが、その検査成績は疾病防除対策にとってもきわめて貴重な資料といえる。したがって、と畜検査の成績は疾病モニタリングの一環として積極的な利用を図るべきであり、食肉衛生検査所、家畜保健衛生所および農場間の連携をさらに強化する必要がある。

(第32回日本豚病研究会講演要旨)

住所: 〒190 東京都立川市富士見町7-238

*Actinomyces suis*は主として豚の乳房に感染して線維性の病変を作ることが多い^{1), 2)}。しかし今回、離乳子豚が神経症状を呈して死亡する事例に遭遇し、その原因が*A.suis*の感染によるものであることを確認した。このような事例はきわめてまれであり、類症鑑別上も注意すべきものと思われるので、その概要について報告する。

発生状況と症状

発生農場は三重県上野市にあり、平均繁殖母豚550頭を飼養する大規模な一貫生産農場である。発生は1986年11月下旬から散発的に認められるようになり、発生期間は翌年1月に終息するまでの約2か月間であった。発病子豚は20~50日齢のものに限られ、離乳後数日以内に発病するものが多かった。発生期間中に離乳した子豚は合計2,075頭に及んだが、そのうちの約100頭に神経症状を主徴とする異常が認められ、重症例の62頭は死亡した。なお、当該養豚場では過去に類似疾病の発生は認められていない。

共通の臨床所見として一般症状の悪化のほか、神経症状が発病豚のすべてに認められた。まず後肢の運動失調から始まり、ついで後軀麻痺をきたして起立不能に陥り、遊泳運動に移行した(写真1)。神経症状が重篤のものは死亡したが、仮に死亡を免れてもその後の発育は著しく不良であった。

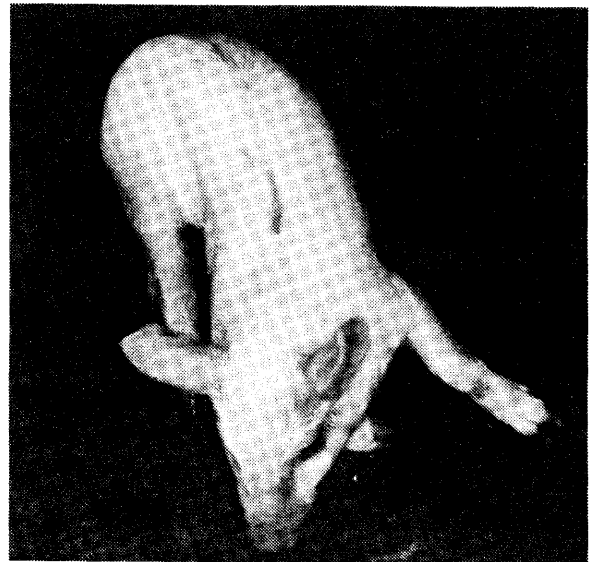


写真1 発病子豚の神経症状(供試子豚No.4)

離乳子豚の*Actinomyces suis*感染例

神原秀夫(三重県伊賀家畜保健衛生所)

Sakakibara, H. (1988). A case report: *Actinomyces suis* infection in weaned piglets. Proc. Jpn. Pig Vet. Soc., No. 12: 9-10.

臨床病理検査の成績

供試材料として死亡子豚3頭および発病中の子豚1頭について臨床病理検査を実施するとともに、同居豚についてオーエスキ病の抗体検査を行った。まず供試子豚の解剖検査の所見として、脳における充血および

脳脊髄液の増量が特徴的であった。また一部の子豚には膝関節の腫大および関節液の増量が認められた。

細菌検索の成績では供試子豚全例の脳材料から同一の培養性状を示すグラム陽性菌が多数分離された。分離菌は常法に従って各種の性状検査を行い、その成績から *A. suis* と同定された。分離菌株はすべてペニシリンG, アミノベンジルペニシリン, クロラムフェニコールなどの抗菌剤に対して感受性を示した。一方、同居豚に対するオーエスキー病の抗体検査の成績はすべて陰性であった。

病理組織学的検査では常法に従ってHE染色による組織標本を作製して病変の観察を行った。その結果、供試子豚における特徴的な所見として化膿性髄膜炎、脳脊髄炎が認められた。その要約は表1に示したとおりである。

表1 *A. suis*感染子豚の病理組織所見¹⁾

臓器	組織所見	供試子豚 ²⁾			
		1	2	3	4
大脳	化膿性髄膜炎, 脳室炎	卅	卅	卅	卅
	血管周囲性細胞浸潤	卅	卅	卅	+
	血管壁の壊死, 出血	+	+	+	+
小脳	化膿性髄膜炎	卅	卅	卅	+
脊髄	中心管, 髄膜に好中球浸潤	卅	卅	卅	卅
	大小の腫瘍の形成	卅	+	+	-
	血管壁の壊死, 出血	卅	+	卅	-
	血管周囲性の細胞浸潤	卅	+	+	+

1) 卅: 強度, 卅: 中度, +: 低度, -: 正常

2) 1~3: 死亡豚, 4: 発病中の豚

対策と考察

豚の放線菌症の発生はわが国でも知られており, *A. suis* は豚の扁桃などに常在するといわれる³⁾。またその感染部位はほとんど成豚の乳房に限られるが、今回の事例では成豚には何らの異常も認められなかった。感染・発病のみられたものはほとんど離乳直後の子豚であり、しかもその臨床症状は神経症状を主徴とし、病理学的には化膿性髄膜炎、脳脊髄炎の所見を呈していた。このような *A. suis* 感染例はきわめてまれなものと考えられる。

最近、離乳子豚における *Streptococcus suis* type 2 感染による髄膜炎の発生が増加しつつあるが⁴⁾、今回の事例ではそれとの類症鑑別が要求された。またオーエスキー病との類症鑑別も必要とされたが、いずれの疾病も否定された。しかし今回の脳病変を主徴とする特殊な病型の成立にどのような要因が関係したかは明らかでないが、一般的には日和見感染とみなされよう。

以上のことから、その防除対策として離乳子豚に対する種々のストレス緩和策の指導を行った。すなわち、子豚舎の環境改善や消毒強化をはじめ、去勢時期を早めさせた。また病豚の早期発見に努め、ペニシリンによる治療を実施した。いずれの対策も根本的なものとはいえないが、発生防止に多少なりとも有効であったと考えられた。

参考文献

- 1) Grässer, R. (1962). Mikroaerophile Actinomyceten aus Gesäugekinomykosen des Schweines. Zentrabl. Bakteriell. Parasit. Infektionskr. Hyg., I. Orig., 184: 487-492.
- 2) 東量三 (1987). 放線菌症, pp436-437. 豚病学 (3版), 近代出版, 東京.
- 3) 東量三, 石橋幸子 (1976). 豚由来の *Actinomyces naeslundii*, *Actinomyces viscosus* について. 第36回日本細菌学会関東支部総会抄録.
- 4) 東量三, 杉本千尋 (1987). レンサ球菌症, pp355-361. 豚病学 (3版), 近代出版, 東京.

(受付: 1987年12月14日)

住所: 〒518 三重県上野市四十九町2802